

佑 啓

ゆ う け い

発行 者
社会福祉法人 佑啓会
理事長 里見 古英
〒290-0265
千葉県市原市今宮1110-1
TEL 0436-36-7611
FAX 0436-36-7612
編集者 広報委員会

朝が来るのだ

三股 金利

朝四時起きで海に向かう。船は予約してあるが波が心配なので途中で確認の電話をする。「あいよー今日は大丈夫だおー」心配した台風も北上し、房総半島を車で南下すると次第に白々と明けて穏やかな海が右手に見える。釣り道具を抱え六時に乗船。船といっても手こぎの二人乗り。相方は裏面で登場する野球小僧である。宴会でたまたま釣りの話をしていたら「僕も連れてって下さいいよー」「やったことないから」酒の勢いで「オレのところへ泊まって朝早く出発だ」そんなイキサツだった。

ボートに乗り込み沖へ出るとブカリブカリと小舟の座布団を敷いて地球に座っているよう。水平線の向こうには富士の頂きも霞んでいり、と唐突に「地球の上に朝が来る」メロデーが浮かび「その裏側は夜だろう」と下の句のように自然に続いたのだ。なんとなく愉快になった。「こんな気持ち、前に座る二十代の若者にはわかんねえだろうなあ。イイ時代だった。もっともそんな時代に生まれてないし、可哀相なヤツだ」とひとりごちた。唄とともに映像が浮かぶ、ところがあれば、

ワダヒロシとマシナスターズではないし、大正テレビ寄席に出ていた○△ボーイズだったかなあ、思い出せそうで出てこない、抜けそうで抜けかない短い髭のようになっていました。ああもどかしい。都会の喧騒を離れ、久しぶりに自分で釣った魚を肴に一杯やる。想像するだけでウキウキ。広々とした明け方の海に身を置くことで、連想されたのだろう。環境と記憶の絶妙なとりあわせの産物だった。



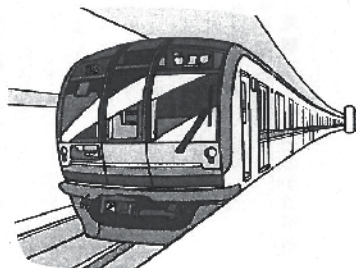
なぜ必要もない昔のことは出てくるのに、数日前のことがぼんやりとしてしまうのだろう。手帳を見直して「ああそうだった」ということが二度や三度ではない。会合で挨拶を交わしながら名前が浮かばない。そのまま調子を合わせ、会話を進め、別れた後に「誰だ

つけあの人」こんな事が多くなっていました。先日のテレビ。CDを一度聞いただけで、ピアノで再現したりアレンジしたりする障害を持つ人の様子を見た。記憶の分野の特殊な能力を持つ人たちは身近にいた。例えば唇がすべて空で言える人、職員車のナンバー、時刻表などが頭に入っている人、時には「何年何月何日にこんなネクタイをしていたネ」と私に言う。「アツタリ」本当はさっぱり忘れていたけれど混乱させてはいけない。そんな記憶されたものが頭の中を渦巻いている状況を想像しても本人は嬉しそうだ。不動の数列にえもいわれぬ楽しみや安心を感じているのかもしれないのだ。

作業所の昼食時、食堂のテレビはNHKのニュースがかかっている。私も画面の見えるイスを気づかれぬよう狙ってウロウロする。最後に東証株価とか為替の相場が映ると「今日は上がりました。ちょうど今何十銭下がりましたネ」解説してくる。「表示される数字の動きだけでなく画面に含まれる情報のすべてが頭の中で規格化されているからこそ文字の大小まで気づくのでしょうか。こんな能力があれば、試験など楽な話だろうなと思う反面、情報の氾濫をどう整理し、処理しようとしているのか。



先のピアニストの場合、一度聞いて獲得された情報を再現するだけでなく、アレンジしてしまう能力に驚かされた。小さいときからの膨大な学習によってシンセサイザーのように進化してしまったのか。もしかして才能を見逃しているとしたら・・・。日常の一人ひとりを思い浮かべながら、脳の不思議と自らの退行を重ね合わせ「諦めるのはまだ早い」と言い聞かせたのだ。



電車の中で広汎性発達障害ともしき人を見る機会が多くなった。学生服であったり、会社員風であったり、様々。社会参加がすすんでいる証左なのだろう。ドアの上に掲示された路線図をブツブツ言いながら一定の間隔で席を立つては指差し、車両の間隔で行き来しながら一定の場所を確認するように触っている。私はそんなセレンニのような行動を見ながら、周りの人たちの観察する。

な行動と映るのであるが、彼らの特性が解らないだけである。若い世代のことが理解できない私と同じである。今、国では障害者団体や当事者によって今後の障害者福祉のありようを検討し、障害者の権利という観点から、洗い直そうとしている。今までにない形での検討によって、社会をどう創り上げようとしているのか。千葉県でも堂本知事の下、同様の手法で差別をなくすための条例を作った。国としての規範となれば更に上の段階を求められるのだろう。しかし、一般の社会生活上にどういった変化をもたらすものか気がかりなところもある。電車の中のような風景を変えるものは法や規則ではないと思うから。それを強くしすぎれば、規制されると思っている側は距離を置き、なるべく関わらないようにするだろう。普通の暮らしとは、人との関わりを身近に感じる事である。それが少なくなるとは本末転倒だ。そうではなくても福祉の現場で働きたいと思う人が減少している状況を考えると不安にかられるのである。更に人口の減少や不況、平和に影響するような国と国との関係。巨悪を許さずというシンボルの体たらく。借金をしながらのバラマキ。地方の疲弊。私は地域に支えられて育ってきたので「国家無くて福祉無し」と思っている。福祉は人間関係の起点なのにこの先どうなってしまうのか心配なのだ。

仲間内の議論だけでなく社会にぶつけてみなければならぬ点も多いはず。施設を運営しているも、内輪での改善や社会に向けての行動も地域住民がどう感じているかという身近な意見が必要である。行政の作った基準とは関係のないモノサシがそこにある。相手はいわば素人、この人達にわかって頂くという身近な努力が我々に求められている。

アタリ(魚が餌をいじっている)と糸を伝って竿に感じる振動)をじっと待ちながら考えることも仕事のこと。スポーツをやって酒を飲むときも仕事の話。付き合ってくれるのも仕事の仲間。どこへ行っても仕事からは離れられない。ケータイは職場と繋がっているし、便利で困った世の中だ。

そんなとき、「地球の上に朝が来る」は何ともスケールが大きく、日常の些細なことを私試してくれるような感慨だった。今は新しい福祉の夜明け前。現場では不祥事や何やらで、こちんまりと自信をなくしているように見える。もっとおおらかにこの仕事はしたい。社会全体の連帯が弱くなっている状況だからこそ、利用者を始めとする人間関係の深化を現場から築きたい。その力が社会から期待される源になっていくはずである。夜は必ず明けるから。

(大塚福祉作業所所長)



今年の夏も沢山の方々から里学舎を訪れました。その中から二名の学生さんから感想を寄せて頂きましたので、ご紹介致します。

実習を終えて

日本社会事業大学
社会福祉学部
新井 沙依

今回ふる里学舎で実習をさせて頂き、職員の方からお話を伺ったり、利用者の方と関わったりしていく中で様々な事を感じ、考えそして学ぶ機会を得る事が出来た。その中でも特に印象的であった二点について、書いていきたいと思う。

まず一つ目は「利用者間」の社会が存在しているという点である。生活をしている空間であるから、そこには利用者間のやり取りがあり、社会的な関わりが生まれるというのには、当然かも知れないが、私には純粋な驚きであった。これは宿直業務の実習をさせて頂き感じたことである。コミュニケーション能力の高い方同士だけではなく、障害が重く言語でのコミュニケーションが苦手な方も、うまく伝わらない時には手が出ることもあるもの、お互いに関わり合い、そこには「関係性」がきちんと存在しているというところに気付く事が出来た。仲の良い悪しき喧嘩もお互いの関わり合いの中で生まれてくる。同室のパートナーとの問題など職員の方には大変な面も多いのだと思うが、食器を片付けてあげたり、お互いに手助けをしている姿は、とても気持ちよく温かくなるものであった。

ボランティアを終えて

千葉県立千葉中学校三年
梶 智裕



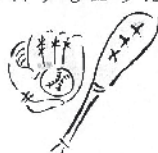
三日間、アネッサティセンターでボランティアをさせて頂いた。普段なら会う機会すらほとんどない障害者の方々と話したり、一緒にレクリエーションをするのはとても楽しかった。最初は、自分の言っていることが伝わらないのではないだろうか、迷惑になるのではないかと心配だった。しかし、職員の方、利用者の方々がごく普通に話してくれ、そのきっかけで会話できました。普段はあまりしゃべらないのですが、いつもより話して、ごく自然に笑ったりすることができました。重症心身障

害者の方と会うことは初めてで、一体どんな人達だろうと恐かったです。しかし、予想とは違って彼ら自身の意思、喜び、怒り等がレクリエーションの中で伝わってきて、ああ、生きているんだと実感しました。それまで学校で「特別学級」という形で、障害者と付き合ってきたが、正直、乱暴と言う事を聞かない上にすぐかんしゃくを起こすので、嫌だ、近付かないようにしようと思って、避けていました。アネッサやふる里学舎で会った様な障害者ばかりではないですが、それでも今回のボランティアで障害者という枠で決めつけるのではなく、一人一人色んな人がいて、それぞれに特徴があると思うようになりました。決めつけずにこれからは人と接していこうと思います。その他にも、人と話す時どうすれば話し始められるのか、といった小さな事や生き続けるのは、とても辛い仕事だということ等、様々なことを考えるのもいい機会になったと自分では思っています。また機会があれば、ボランティアをさせて頂いただけではないと思います。三日間、有難うございました。



での優勝報告会では三千人を超えるファンの前で、「全ての沖縄県民に勝ち取った優勝旗です」と自信満々に言い放った我如古士将の言葉には沖縄県民だけでなく全国民が感動を覚えると共に強い敬意を表したのではないだろうか。

「甲子園」高校球児なら誰もが憧れる場所であり、目指す場所である私も高校球児として甲子園出場を目指し毎日白球を追いかけていた。今思えば、よくやっていったと思う。野球部を引退した当初は、やっとな遊べる、やつと勉強が出来る(と)開放感に浸ったものだが、高校卒業、大学進学と年を重ねるにつれて物足りなさを感じ、もう何かに熱く夢中になる事は出来ないのかと寂しい気持ちと焦りの気持ちが入り混じった。就職をするにあたり「夢中」というベクトルは仕事に向ければ、仕事人になつていくのだろうと勝手に考えた。それはそれで素晴らしい事だと思っていた。



ふる里学舎で働かせていただく事になり迎えた初日、職員が楽しみなければ利用者さんを喜ばせる事は出来ません。皆さんたくさん遊んで、良い仕事をして下さい。と里見理事長から言葉を頂いた。(たくさん遊んで良い仕事を?)うん、釣りバカ日誌の浜ちゃん?でも浜ちゃんも遊びすぎか?当時の言葉の意味や深さをどれだけ理解できていたのかは不明だが、少なくとも今日から社会人、仕事人、とガツガツに気負っていた緊張感が自然と和らいだのを鮮明に覚えている。

「憧れの甲子園」
須藤 岳人
最後は自慢の直球で終わらせた。いかに品投げ手、粘る打者に対してツインズから高め直球空振り三振。沖縄代表興南高校、見事史上六校目となる春夏連覇を達成しました。毎年夏を沸かせる甲子園の熱き戦い。今年は異常気象といわれた猛暑続きの中、熱戦を次々と勝ち上がり日本中を盛り上げた沖縄興南高校の活躍は記憶に新しい。初めて深紅の大優勝旗が海を渡り沖縄へ。母校

易ではないと選手全員が痛感した。仕事に野球に夢中に四年、創部五年目を迎えた今年、四年間全く結果を残すことができなかった。もう後がない、ここで結果を残そうとチームで話し合い、背水の陣で臨んだ。同トーナメントには全国大会常連チームの名を連ねて、くじ運では完封負け。しかし、それは毎年の事。「どうせなら強いところを倒して全国に行きましようよ。」などと、妙に前向きな職員も。プレイボールと共に熱戦な投手戦が始まる。あつと言つ間に0-10で迎えた最終回の攻撃。まさかの押し出しデッドボールでサヨナラ勝ち。サヨナラの勢いそのままに決勝戦では自慢の打撃が大爆発。相手のミスにも助けられながら危なげなく大勝。ついに悲願の甲子園出場の切符を手にする事が出来た。

九月七日(九日)に北海道帯広で開催される全国大会出場の前日、荷造りをしている。何となく懐かしな気持ちになった。このバンドでヒットを打ったから試合ではこのバンド。小学生から続けた経験と自信を自然にやっていた。高鳴る気持ちを抑え布団に入つて目を瞑れば全国の猛者達が凄まじいボールを投げつけてくる。ドキドキ感でなかなか眠れないのは、あの頃と変わらぬ。パツと起き冷感庫から何匹も、そしてグッスリ眠る。これがあの頃は違つた。

羽田から飛行機に乗り込み、いざ帯広へ。関東の猛暑に比べればやや涼しげだが日差しそのものは変わらず。しかし、一面広がる緑豊かな自然、綺麗な青空に澄んだ空気。こんなところで野球が出来るとは真夏の甲子園でプレーするよりも幸せかもしれない。

まずは全チームが参加の前夜祭。ふる里学舎が全国トップレベルと自負している夜の部が始まる。各チーム紹介で、関西や熊本本などの各地の方言を聞いてみると、改めて「来たんだな、甲子園。」と感動しているのを尻目に、ふる里学舎代表夜の四番打者日郷支隊員が悠々と壇上へ。得意のトリック会場を沸かせ、セクター前クリーンヒット。しかし、AKB48のダンスをするチームや突然服を脱

ぎだすチームもあり、これは惜敗か。「そういうことなら来年はフラボーイだな。」と負けず嫌いな里見理事長の一言。この一言で、また沸々と燃え上がる夜のエース木支隊員。そんな様子をニヤニヤ見ている自分も嫌いでない。来年は荷物が増えそうだが、二次会では、帯広の地で同じく初出場の緑葉大久保学園さんと交流。お互いの健闘を祈りつつ盛大な一日となった。

二日目はいよいよ決勝、北陸代表の石川県「陽風園」。六年連続七回目の出場と相手には不足なし。しかし、自慢の打線も相手投手に封じ込まれ完封負け。再び夜の部、慰労会。折角連れて来て頂いたのに不甲斐無い結果に肩を落とす部員に里見理事長から、来年の開催地は奈良。皆で阿修羅を見に行こう。「単純明快な野球部員はそのあたりが言葉に胸に、帯広の長い夜を存分に楽しんだ。

悲願の甲子園出場を果たした今、もちろん次の目標は全国制覇。そして、優勝旗を持ち帰り、応援してくれた利用者さんや残った仕事をしてくれた職員の前で、N野主将がこう言うんです。「ふる里学舎全員で勝ち取った優勝旗です。」と。そんな日を夢見ること、また「夢中」になつて仕事が出来るとです。(小石川福祉作業所 支援員)

編集後記

なかなか明るいニュースが無い。昨日、相模原で連勝中の横浜白鵬の活躍は、目を惹くものがある。取り組む時のバランスの良さ、足腰の強さは、素人目線ながら、揺るがない強さを感じます。ふる里学舎も年々規模が大きくなつていますが、横綱のようにバランスが良く地に足を付けた支援を職員一同心掛けていきたいと思ひます。気候が良くなり作業にも活気が出てきた市原より佐啓七十四号をお届けします。並木 傑